

バイスヴェンガー教授 業績紹介

バイスヴェンガー教授 Prof. Dr. Kirsten Beißwenger (1960. 10. 21–2013. 5. 15) は、獨協大学で 20 年余にわたって教鞭をとりながら、世界的なバツハ学者として研究成果を発表し続けられました。主に獨協大学ホームページに掲載されていた情報に基づいて先生の業績をまとめたものが、1～7 ページの一覧です。今回入手することのできなかった文献もありますが、ここでバイスヴェンガー先生のご研究を振り返り、偲びたいと思います。

バイスヴェンガー先生の研究は、大きく(1)J. S. バツハ Johann Sebastian Bach (1685–1750) 関連の研究、(2)DaF (外国語としてのドイツ語) 関連の研究、(3)その他の業績、に分けられると思います。(1)バツハ関連では、①バツハの所蔵楽譜研究、②その他のバツハ関連資料研究および楽譜校訂、③カンタータ研究、④それ以外のバツハ関連著作、に分けたいと思います。(2)DaF 関連では、日本におけるドイツ語教育についてやドイツ語授業における音楽の活用方法についての論文・教科書があります。(3)その他の業績では、さすらいの歌 (Wanderlied) に関する研究、ワーグナー Richard Wagner (1813–1883) 研究、ドイツの音楽生活についての論考などがあります。これらについて、内容をかいつまんで紹介したいと思います。本稿では著作のタイトルと出版年のみ記しますので、詳細な書誌データにつきましては、業績一覧をご覧ください。

(1) J. S. バツハ関連の研究

バイスヴェンガー先生は、テュービンゲン大学およびゲッティンゲン大学で音楽学を学ばれ、1990 年にバツハの研究で哲学博士号を取得なさいました。その後、獨協大学に着任なさるまでの 1991～1993 年にはゲッティンゲンのバツハ研究所に学術研究員として勤務なされ、いわばバツハ研究の最前線で研究を

進められました。ご主人の故・小林義武先生（元成城大学教授、1993年3月4日に結婚）も世界的なバッハ研究者であり、共同で進められた研究もあります。

(1)－① バッハの所蔵楽譜研究

バイスヴェンガー先生は、1990/91年の冬学期に、バッハの所蔵楽譜に関する研究で、ゲッティンゲン大学哲学博士号を取得なさいました。その博士論文に少し手を加えて出版されたのが、『ヨハン・ゼバスティアン・バッハの所蔵楽譜文庫 Johann Sebastian Bachs Notenbibliothek』（1992年）です。この本は、バッハが所蔵していた他者作品の楽譜にどのようなものがあったのかを研究し、バッハの創作等への影響を探ったもので、おおきく2部分から構成されます。第1部「研究と復元」では、バッハが所有していたことが明らかな楽譜、資料は残っていないが状況証拠等から所有していたと考えられる楽譜にどのようなものがあるか、いつ頃どのように入手したか、バッハの死後はどのように伝承されたか、バッハは他者作品を筆写するときどのように作業したか等について書かれています。バッハは、200年ほど前にあたる16世紀の作品から同時代の最新の音楽まで収集し、アンテナを張りめぐらせていたことが分かります。また、自らの作曲の重点に合わせて、たとえばドイツ語による教会カンタータを多く作曲した1720年代には中部ドイツの教会音楽を、ラテン語ミサ曲を作曲した1730年代にはイタリアのカトリックの宗教音楽を多くコレクションに加えました。一方で、バッハが一度も作曲することのなかったオペラは、所蔵楽譜には1曲も含まれません。第2部は目録で、Ⅰ. 証拠に基づいてバッハが所蔵していたことが明らかな作品、Ⅱ. 資料からは立証できないが所蔵していたと考えられる作品、Ⅲ. 除外すべき作品、に分けてカタログ化されています。それぞれの作品には作曲者姓のアルファベット順に番号が与えられ、その作品の作曲者・タイトル・編成・資料・歌詞の出典・出版譜・参考資料等についての情報がまとめられています。この研究以前にも、バッハがたとえばヴィヴァルディ Antonio Vivaldi（1678-1741）の協奏曲から影響を受けたことなどは広く知られていましたが、バッハが手許に置いていた楽譜の全貌が

明らかにされたのは初めてのことで、バッハの音楽を理解するうえで重要な情報となり、その後のバッハ研究文献で頻繁に引用されています。この研究内容をバイスヴェンガー先生ご自身が一般読者向けに分かりやすく書き直して紹介なさっているのが、2つの日本語文献「バッハの所蔵楽譜文庫」(1996年)、「バッハの音楽文庫——他人の作品の収集活動に反映された、バッハの発展と芸術」(1999年)です。また、この研究の過程で、大英図書館所蔵のヘンデル Georg Friedrich Händel (1685–1759) 筆の資料 (R. M. 20. g. 10) に書かれたト長調のグロリアとト短調のキリエが、バッハの所蔵楽譜にも含まれるロッティ Antonio Lotti (1667–1740) の作であったことが明らかにされました（「ヘンデルの所蔵楽譜文庫中のアントニオ・ロッティのミサ曲 Eine Messe Antonio Lottis in Händels Notenbibliothek」、1989年）。

(1)ー② その他のバッハ関連資料研究および楽譜校訂

バイスヴェンガー先生が1991～1993年に勤務されたゲッティンゲンのバッハ研究所は、当時の東ドイツ、ライプツィヒにあったバッハ・アルヒーフ（資料館）と共同で『新バッハ全集 Neue Bach-Ausgabe』の楽譜校訂を行っていました。この全集版楽譜を作るにあたっては、手稿譜資料およびオリジナル印刷譜が網羅的に調査され、資料の従属関係が明らかにされ、研究成果は校訂報告書（kritischer Bericht）にまとめられました。バッハの筆跡や楽譜に使われた紙、筆写者の筆跡などについても研究が進められました。すでに博士論文での資料研究の成果が認められての着任となったのだと思いますが、バイスヴェンガー先生は、バッハの楽譜資料の研究をこの後もご自身の研究の重要な柱として進められます。

先生は『新バッハ全集』で疑義のある作品（バッハの真作かどうか分からない作品）を扱う巻の校訂を担当なさり（ラテン語教会音楽および受難曲、楽譜および校訂報告書、2000年）、偽作問題やバッハによる他者作品の編曲について研究を深められます。紀要論文「新バッハ全集に収めるべき疑義のある作品の選択について Zur Auswahl zweifelhafter Werke in die Neue Bach-Ausgabe」

(1995 年) では、作曲者がバッハであるか疑いのある作品が 500 にものほり、筆跡や用紙、資料伝承状況から検討されていることが説明されます。『新バッハ全集』では、偽作問題に決着をつけることなく、研究に必要な材料を提供することが求められていました。そのため、バッハ作と考えるのが適切ではない作品については校訂報告書のみで言及し、真純性問題が未解決の作品を楽譜にします。その原則に従い、ご自身の担当なさるラテン語教会音楽および受難曲について論じています。ドイツ・新バッハ協会の機関誌『バッハ年鑑 Bach-Jahrbuch』に発表された「他の作曲家の作品にバッハが手を加えたことについて Bachs Eingriffe in Werke fremder Komponisten」(1991 年) は、博士論文の研究とも関連し、バッハが他者作品の楽譜を筆写する(または筆写させる)際の加筆を、もとの楽譜の誤りの単純な修正から編曲までの 6 つに分けて考えます。しかし、バッハの改作の仕方が明らかにできるのも、原曲の楽譜が伝えられている場合に限られ、バッハの書いた資料がその作品を伝える唯一の資料である場合には、比較ができません。そういった作品には、作曲者名の明記されていないラテン語の教会音楽作品が多いとし、まずは原曲の知られている作品でバッハの手法を検討した後、原曲の知られていない作品について考察します。その結果、研究対象 9 作のうち 5 作は、原曲をそのまま書き写したものであることが分かります。バッハは作品を筆写する際、まずは手本の通りに書き写し、あとで誤りに気づけば修正します。また、演奏機会に合わせた変更を行ったり、改善を施したりする場合がありますが、その作品の本質はとどめています。(大規模な変更が必要な場合には、むしろ自作の楽章で置き換えていました。) これらの研究成果をさらに進め、『新バッハ全集』の担当巻の校訂報告書では、ラテン語教会音楽については「真純性の疑わしい作品」「他者作品の編曲」「他者作品へバッハが少し手を加えたもの」「以前はバッハ作とされた作品」の 4 つに分け、受難曲については「編曲」と「以前は真純性が疑われた作品」を扱っておられます。この巻の校訂にあたり、獨協大学からドイツ滞在許可を得たことへの感謝の言葉も記されています。『新バッハ全集』では、ほかに三位一体後第 4 日曜日用カンタータの巻の校訂を、ご主人の小林義武先

生とともに行われました（楽譜および校訂報告書、1993年）。

『新バッハ全集』の枠内ではありませんが、バッハの《カンタータ第190番》（鈴木雅明・鈴木優人復元）の楽譜校訂（2012年）、《無伴奏チェロ組曲》（BWV 1007～1012）の楽譜校訂（2000年）も行われました。バイスヴェンガー先生は、ご自身でチェロを演奏なさっていたこともあり、後者の楽譜校訂には特に思い入れがあったようです。この作品には、バッハの自筆譜は残っていません。妻のアンナ・マクダレーナ Anna Magdalena Bach（1701-1760）の書いた筆写譜が現存しており、バッハの自筆譜（消失）から書き写したと考えられますが、スラーなどのアーティキュレーションは疑問を抱かせます。バッハが書いた通りではないと考えられるのです。バイスヴェンガー先生は、バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》（BWV 1001～1006）にバッハの自筆譜もアンナ・マクダレーナの筆写譜も両方残されていることに着目し、バッハの自筆譜をアンナ・マクダレーナがどのように筆写しているかを調査なさいました。アンナ・マクダレーナは、J. S. バッハの真似をして書こうと努めていたと思われる箇所もある一方で、バッハが統一して書いているところをばらばらにしたりしていることが分かり、アンナ・マクダレーナがアーティキュレーションを正確に書く必要をあまり認識していなかったことがうかがえます。チェロ楽譜の校訂にあたっては、《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》自筆譜におけるバッハのアーティキュレーション指示を参考になさったそうです。「バッハの無伴奏チェロ組曲におけるアーティキュレーションの問題 Artikulationsprobleme in Johann Sebastian Bachs Suiten für Violoncello solo (BWV 1007-1012)」(2000年)でも、この問題について論じておられます。

2007年には、『新バッハ全集』のなかで『ヨハン・ゼバスティアン・バッハの筆写者 Die Kopisten Johann Sebastian Bachs』を出版なさいました。この本はご主人の小林義武先生とともに2003/04年にドイツで研究休暇を過ごした際にまとめられ、共著で2007年に出版され、成城大学と獨協大学に献呈されました。バッハのオリジナル手稿譜の作成に関わった筆写者259名の筆跡の特

微や筆写した作品を概観できる労作です。この 259 名というのは、音部記号を含む楽譜おおむね 1 小節以上を書いた人であり、音部記号を書いていない人、数字や歌詞のみを書いた人は除きます。筆写者（コピスト）は、たとえば声楽作品のパート譜作成の時に活躍しました。作曲時に書くスコア（総譜）は、オーケストラや合唱隊で演奏する際、筆写してパート譜にされます。ケーテン時代頃までのパート譜は、バッハ自身が半分位書いていますが、ほぼ毎週 1～2 曲のカンタータを作曲し上演していたライプツィヒ時代はじめ頃（1723 年～）は、パート譜の作成をトーマス学校の生徒¹⁾や家族をはじめとする筆写者に任せ、バッハ自身はパート譜の書き誤りを修正したり、演奏指示や通奏低音の数字を記入したりしました。筆写者の名前が明らかになり、たとえばそれがトーマス学校の生徒だったなら、その筆写者がトーマス学校に在籍していた期間にその作品が演奏された可能性が高くなります。また、以前作曲されたカンタータに別の時期の筆写者の手になる追加パート譜が加わっていれば、その作品が再演されたと推測できます。このようにして、筆写者の情報を用紙の透かし模様やバッハ自身の筆跡の変遷と考えあわせることで、バッハの作品についての知見が増えていったのです。筆写者の研究自体は、この著作の出版以前にも行われ、『新バッハ全集』校訂にも役立てられていましたが、広く参照できるかたちにまとめ上げるにあたっては、バイスヴェンガー先生の功績が大きかったとうかがっています。この研究内容については、紀要論文「ヨハン・ゼバスティアン・バッハの筆写者カタログ——新バッハ全集における古文書学的基礎研究 Katalog der Kopisten Johann Sebastian Bachs. Diplomatische Grundlagenarbeit im Rahmen der Neuen Bach-Ausgabe」（2004 年）でも触れられています。この紀要論文では、バッハ作品の成立年代研究史をたどり、筆写者にはどのような人がおり、成立年代の研究にはどのような意義があるのか、筆写者研究はどのように行われてきたのか概観したあと、上記の著作の内容が紹介されま

1) ライプツィヒ時代のバッハは、市音楽監督およびトーマス・カントルとして、トーマス教会付属学校の生徒たちを指導し、市内の教会の礼拝で生徒たちと教会音楽を演奏する仕事をしていました。

す。作品の途中で筆写者が変わるケースもあり、筆写者に注目することで、バッハの工房の事情を垣間見ることできるそうです。

バイスヴェンガー先生は、バッハの遠戚でヴァイマル市のオルガニスト、ヴァイマル宮廷作曲家であったヴァルター Johann Gottfried Walther (1684-1748) の研究もなさいました。バッハが1708年から1717年までヴァイマル宮廷に仕えた期間に二人は親交を結び、楽譜を写しあったりしていることから、ヴァルターの存在はバッハ研究にとって重要です。「ヨハン・ゴットフリート・ヴァルターの楽譜の筆跡の年代変遷について Zur Chronologie der Notenschriften Johann Gottfried Walthers」(1992年)では、ヴァルター筆の楽譜資料すべてを対象に成立年代の研究が行われています。ヴァルターの筆跡は、バッハほど年代による変化が大きくなく、また年代の明記された楽譜が少ないなどの難しい状況もありますが、バイスヴェンガー先生は、紙の種類や音部記号・音符等の書き方をもとに4つの段階に分け、それぞれの時期の特徴を論じています。1998年の論文「18世紀初頭の楽譜の入手方法について——ヨハン・ゼバスティアン・バッハとヨハン・ゴットフリート・ヴァルターを例に Erwerbsmethoden von Musikalien im frühen 18. Jahrhundert am Beispiel Johann Sebastian Bachs und Johann Gottfried Walthers」でも、ヴァルターに焦点が当てられています。ヴァルターは、1732年に音楽事典を出版しており、その執筆のために多くの楽譜や理論書を集めました。この論文では、そのヴァルター、および博士論文で扱ったバッハの楽譜蔵書の入手方法について、分かりやすくまとめられています。教師のもとで書き写す、楽譜を交換する、筆写のために楽譜を音楽家仲間や貴族から借りる、別の都市に旅する知人に頼んで入手してもらう、他者のコレクションを死亡時などに買い取る、見本市で購入する、予約購入する、贈り物としてももらうなどの方法が、それぞれ具体例を挙げて論じられています。

バッハの鍵盤音楽作品の資料についての研究もあります。「ショルツ・コレクションにイタリア風協奏曲第1楽章の初期稿が? An early version of the first movement of the Italian Concerto BWV 971 from the Scholz Collec-

tion?」(1995年)は、1969年にゲッティンゲンのバッハ研究所が入手したショルツ Leonhard Scholz (1720-1798) というニュルンベルクのオルガニストだった人物の楽譜コレクションに含まれるバッハの《イタリア風協奏曲》(BWV 971) の資料2種についての研究です。その片方は広く知られている1735年の印刷譜の稿とは大きく異なります。それが印刷譜以前の初期稿にもとづくと考えられることが、ショルツの他の作品の筆写譜との比較から論じられます。バッハの死後、多くの作品は演奏されなくなりましたが、《平均律クラヴィーア曲集》は、忘れられることなく伝えられていきました。「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ生前の平均律クラヴィーア曲集第1巻の受容と広まり Rezeption und Verbreitung des Wohltemperierten Klaviers I zu Lebzeiten Johann Sebastian Bachs」(2002年)では、その要因として、バッハ生前のこの作品の受容のあり方が関連しているのではないかとの問題意識で研究なさいました。《平均律クラヴィーア曲集》はバッハ生前には出版されず、生徒へのレッスン用教材としての性格が強かったようです。18世紀前半の資料としては、第1巻全体を書き写した7つの筆写譜、および一部を書いた13の筆写譜が伝わりますが、弟子が書いた筆写譜はどれも1740年より前のもので、バッハの晩年である1740年代にはレッスンで使われていなかったと考えられます。また、筆写譜を観察すると、弟子たちは《平均律》全曲を学習したわけではなかったこともうかがえます。それにもかかわらず、バッハの死後に《平均律》がいちはやく広まったのは、弟子たちがレッスンで使われた曲を評価していてバッハのものと離れた後にも覚えていたこと、マールブルク Friedrich Wilhelm Marpurg (1718-1795) が1753年の著作でとりあげたことなどが関係しているのでしょう。

2006年の紀要に載せられた「ジングアカデミー図書の帰還とヴァイマールにおける自筆譜発見」(日本語)は、2005年の日本音楽学会全国大会での発表原稿をもとにしています。この論文では、バッハ資料研究の歴史を概観し、最近起こった2つのバッハ資料発見について報告しています。ベルリン・ジングアカデミーは、1791年に創設された合唱団体で、メンデルスゾーン Felix

Mendelssohn Bartholdy (1809-1847) や哲学者・神学者のシュライアーマッハー Friedrich Schleiermacher (1768-1834) がメンバーだったことでも知られます。このアカデミーには J. S. バッハや息子たちの作品を含む貴重な楽譜コレクションがあり、第二次大戦中に旧ソ連軍が持ち去った資料、約 5000 点がキエフ国立音楽アカデミーで再発見されました。一方、ヴァイマルのアンナ・アマリア図書館では、バッハの 1713 年の声楽作品《すべては神と共に、神なしには何もなく Alles mit Gott und nichts ohn' Ihn》の自筆譜が発見されて、話題になりました。

こういった資料研究の成果をもとに、デュル Alfred Dürr、小林義武と共に、BWV 番号で知られる『バッハ作品目録 Bach-Werke-Verzeichnis』の改訂版 (kleine Ausgabe、1998 年) の作成にも関わられました。

(1)－③ カンタータ研究

バイスヴェンガー先生は、バッハのカンタータについても、いくつもの研究成果を発表なさっています。カンタータとは、器楽伴奏を伴い、一般に複数の楽章から構成される声楽作品で、キリスト教会の礼拝で用いるものを教会カンタータ、領主の誕生日祝い等に用いるものを世俗カンタータといいます。バッハの作としては断片・消失作品も含め 200 曲以上の教会カンタータ、30 曲以上の世俗カンタータが知られています。

教会カンタータに関しては、楽章構成についての研究が 2 つあります。「ヨハン・ゼバスティアン・バッハの 2 部構成のカンタータ。構想手段としての編成について Die zweiteiligen Kantaten Johann Sebastian Bachs. Aspekte zur Besetzung als konzeptionellem Mittel」(2002 年) では、24 曲あるバッハの 2 部構成カンタータのうち 8 つのカンタータをとりあげ、カンタータ全体としてまとまりのある形式となるように、バッハがどのような編成上の工夫をして楽章を配列しているのかを研究しています。その結果、ライブツィヒ時代の終わりに向かって、シンメトリーをなす配列や、第 1 部と第 2 部で同様の編成を繰り返すなど、配列上の工夫が増していることが観察されるそうです。「中心は

合唱楽章。カンタータにおける形式と編成 *Der Chorsatz als Zentrum. Form und Besetzung in ausgewählten Kantaten*」(2004 年)では、今度は 1 部構成のカンタータにおける楽章配列を 7 曲のカンタータを例に研究しています。これらのカンタータでは、作曲年代にかかわらず、楽章タイプや編成の配列を工夫することによってカンタータ全体の形式が形づくられているそうです。教会カンタータ関連の論文としてはほかに「トロンバ、トロンバ・ダ・ティラルシ、それともホルノ？ カンタータ《飾りなき心こそ》(BWV 24) のクラリーノ・パートについて *Tromba, Tromba da tirarsi oder Corno? Zur Clarinostimme der Kantate *Ein ungefärbt Gemüthe* (BWV 24)*」(1993 年、ヴォルフ Uwe Wolf と共著)があり、「クラリーノ」と記されたカンタータのパートはホルン・パートが実音で記譜されたもので、ライブツィヒでの前任者クーナウ Johann Kuhnau (1660-1722) の頃からの用語だと論じています。

世俗カンタータについては、『バッハのカンタータ・ハンドブック *Bachs Kantaten. Das Handbuch*』という本(2012 年)のなかで、70 ページ以上にもわたって書いておられます。はじめに世俗カンタータ全体を概観した後、各作品の解説がなされます。概観においては、演奏機会、資料伝承状況、歌詞を書いた詩人などについてまとめられています。「ヨハン・ゼバスティアン・バッハの世俗カンタータにおける形式設計 *Formpläne in weltlichen Kantaten Johann Sebastian Bachs*」(2013 年)は、バイスヴェンガー先生が生前最後に発表された論文でしょう。2013 年 1 月に逝去なさったご主人の小林義武先生を記念する成城大学の紀要に収められています。世俗カンタータの形式原理についてはあまり研究がなされてこなかったなか、上で紹介した教会カンタータ研究と同様の手法で、3 曲の世俗カンタータを例に研究なさっています。

(1)－④ それ以外のバッハ関連著作

「バッハ、これは誰なのか？ バッハの生涯と作品に関する考察」(日本語、2003 年)は、バッハ没後 250 周年を記念して 2000 年に獨協大学で開かれたゲック Martin Geck の講演に先立って行われたレクチャーの原稿です。バッハの

生涯と作品について概観した後、バッハにとって大切だったのは専ら芸術であり、バッハは現代的な意味における芸術家であったと結んでいます。

「カール・ツックマイヤーのバッハ・フーガ Carl Zuckmeyer. Bachfuge」(1994 年)は、ツックマイヤー Carl Zuckmeyer (1896-1977) の『バッハ・フーガ』(1926 年)という詩を取りあげます。フーガという音楽形式を用いたこの詩を分析するに先立ち、フーガの形式についてや、ツックマイヤーの兄は音楽家で彼自身も音楽の教養があったことなどが説明されます。この詩は、バッハの鍵盤作品に多い 4 声フーガで 3 つの主題展開部をもつタイプにあたること、ツックマイヤーは 20 世紀はじめ頃の教会音楽家としてのバッハ像に則り、信仰心の表明としてバッハの名のもとにこの詩を書いたことなどが記されています。

(2) DaF (外国語としてのドイツ語) 関連の研究

バイスヴェンガー先生は、音楽学を主な専門としておられましたが、獨協大学でドイツ語を教える立場となってから、ドイツ語教育に関する研究も発表なさいました。紀要論文「明治後期におけるドイツ語の地位についての諸問題」(日本語、1998 年)では、1860 年頃から日本でドイツ語が普及しはじめ、医学や法学といった学問において重要な役割を果たしていたにもかかわらず、1903 年以降ドイツ語学習者が減る状況になったことについて、その原因等を探った論考です。「音楽学者で外国語の講師 — あるいは、ドイツ語教員をしながら、修得した職業にどうすれば忠実であり続けられるのか Als Musikwissenschaftlerin Lektorin — oder: Wie man als Deutschlehrerin dem erlernten Beruf treu bleiben kann」(2000 年)では、獨協大学ドイツ語学科のカリキュラムおよび担当授業を紹介しています。ドイツ語講読(テキスト研究)の授業では、曲例を鑑賞しながら、作曲家の手紙、自伝、音楽史、小説の一部など、いろいろな種類のテキストを読むことで、読解のテクニックを習得することを目指します。最も学生に好まれるのは音楽家の逸話だそうです。ドイツ語講読の授業で

は、音楽はドイツ語学習の手段ですが、ゼミでは逆にドイツ語が音楽を学ぶ手段となります。ゼミでは、文献を読んだり音楽作品を分析したりするほか、学生は研究発表とレポートをこなします。そのほか、卒業論文の指導についても書いておられます。「日本の大学における DaF の CLIL —— 音楽学専門演習を例として CLIL für DaF im japanischen Hochschulbereich am Beispiel eines musikwissenschaftlichen Fachseminars」(2007 年) および「ドイツ学を学ぶ学生のための音楽学専門演習 —— 専門教育の授業の方法論のための手がかり Musikwissenschaftliches Fachseminar für German-Studies-Studenten — Ansätze zu einer Methodik im fachlichen Unterricht」(2008 年) では、バイスヴェンガー先生が担当なさっていた学部 3 年生以上のための専門演習について論じられています。CLIL とは内容言語統合型学習のことで、DaF (外国語としてのドイツ語) 授業における音楽の取り入れ方、ドイツ語を使った音楽ゼミナールについて、先行研究をふまえて論じられます。バイスヴェンガー先生は、特に「描写形容詞 beschreibende Adjektive」を活用した音楽分析を重視しておられます。形容詞の一覧を学生に配布し、鑑賞する楽曲にどの形容詞がふさわしいか、理由とともに述べさせる方法です。そこから、音楽ジャンルの特徴を導き出し、同種の作品の分析に当てはめていっておられたようです。和声学等の音楽分析の手法を学んでいない学生にも取り組みやすい方法を工夫しておられたことが分かります。

『音楽史を旅しましょう Reisen wir durch die Musikgeschichte!』(2001 年、山路朝彦と共著) は、音楽とゆかりの深いドイツ語圏の都市を選んで、その都市で活躍した音楽家などについて書いた文章を読み、設問に答えていく教科書で、ドイツ語講読の授業用に作られました。バイスヴェンガー先生は、日頃から、学生に配る教材はドイツ語文献からそのまま引用するのではなく、学生に理解しやすい表現に書き換えておられました。この教科書のドイツ語も、難しすぎず、理解しやすいものとなっています。

バイスヴェンガー先生ご自身は業績一覧に挙げておられませんでした。現在、獨協大学ドイツ語学科の「基礎ドイツ語」の授業で使っている文法教科書

『日本語で学ぶドイツ文法 Schritte international. Grammatik für japanische Lerner』(矢羽々崇、Hueber、2009 年)の作成にも協力なさいました。

(3) その他の業績

バッハ関連、DaF 関連以外にも、多くの業績があります。紀要論文「私は遠い国へとさすらう — 1800 年以降のドイツのピアノ伴奏歌曲におけるさすらいと、その社会史的背景 Ich wandre fort ins ferne Land — Das Wandern im deutschen Klavierlied nach 1800 und seine sozialgeschichtlichen Hintergründe」(2010 年)は、シューベルトの《糸を紡ぐグレートヒェン》(D 118) が作曲された 1814 年から 1850 年頃までに作曲されたドイツ歌曲のうち、タイトルまたは歌詞に「さすらう wandern」の語またはその名詞形や複合語を含む作品を研究したものです。2009 年度にドイツで行った調査でそのような作品は約 130 曲ほどあり(南西ドイツ歌曲楽派の作品等を除く)、この論文ではそれらを概観しています。

「ワーグナーのギリシア理解に関する注釈」(1993 年、伊東史明訳)は、1847～1852 年のワーグナーのギリシャ文学への取り組みについて研究しています。ギリシャ悲劇はワーグナーの楽劇の手本であるという見解に対し、インゲンホフの研究を参照しながら、ワーグナーのドラマの形式はむしろ近代のジャンルから強い影響を受けていること、ワーグナーは自分の無政府主義的世界観の基盤を据えるためにギリシャ悲劇を用いていることを指摘しています。

『ドイツの社会』という本に収められた「市民の音楽生活」(1992 年)は、「ドイツ音楽の伝統」「音楽教育と音楽研究」「音楽会の現状」「音楽生活カタログ」という 4 つの章から構成され、当時のドイツの社会における音楽の現状について記しています。

おわりに

今回、入手できる限りのバイスヴェンガー先生の論文・著書を読み返し、質・量ともに大きな業績を残されたことを改めて実感しました。どの研究も研究史における位置について熟考なさったうえで非常に丁寧に進められており、序からまとめに至るまで、多角的かつ分かりやすく構成されています。奇をてらわず実証的に進められる論は、バッハ研究をリードするバッハ研究所で研鑽を積まれた方ならではのと感じました。それだけに、話題性を先行させた他者の研究に対して批判の意見を述べておられたこともありました。

バイスヴェンガー先生に初めてお会いしたのは、私が大学院生だった頃です。ご主人の小林義武先生の紹介でお目にかかりました。当時お住まいだった大袋（埼玉県）のご自宅にうかがったとき、和菓子が好きとおっしゃっていたのを思い出します。留学中のドイツでもお会いする機会があり、一緒に中華料理を食べたとき、もう一人の日本人の先輩と私に、しっかり就職活動するようにおっしゃいました。その後、数年経って私も獨協大学に勤めることになり、いろいろ教えていただきました。

非常に真面目でいらっしゃったバイスヴェンガー先生は、引き受けた仕事は期日までに責任をもって終わられる方で、新学期の授業開始日までに学期末までの授業準備を終えたとおっしゃっていたほどです。一方、バッハ研究所で最新機器を駆使して作業をなさっていたイメージがありますが、実は機械の扱いは苦手で、コンピュータの操作をお手伝いしたこともあります。それどころか鞆の留め金の開閉にも苦勞なさっていたことがあり、お手伝いしたら、「私はTechnikはすべて苦手！」と微笑んでおられました。

バイスヴェンガー先生は、和菓子のなかでも、茶道で使うような綺麗な花の形の練り切りなどの生菓子が好きだったようです。また、美しく盛りつけられた日本料理なども好んでおられました。海に向こうに富士山をのぞむ湘南のご自宅にとっても愛着をもっておられ、ドイツから運んだ家具などを置いて快適

なお住まいとなさっていましたが、そのご自宅にも小さな石庭を作っておられました。バイスヴェンガー先生が日本にいらしたのは、第一にご主人とともに暮らすためだったと思いますが、日本の文化にも好きなものを見つけてくださって、よかったと存じます。

バイスヴェンガー先生の安らかな眠りをお祈り申し上げます。

(木村佐千子)